
婚約者がぺろぺろしたリコーダーの持ち主だった

はしゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚約者がペろペろしたりコーダーの持ち主だった

【Nコード】

N2438Y

【作者名】

はしゃまくんくん男

【あらすじ】

婚約者がペろペろしたりコーダーの持ち主だった

ガラスの球殻を通して落とされる濃い橙色のフィラメントの熱は、琥珀色のハイボールと、溶けて角を丸くした氷に小さく反射して、瞬く星のような丁字をむすび、ガラスの中のそれらは持つ手の運びに合わせ、ゆらゆらと、からからと、光なり音なりを、週末の解放感かまびすしい大衆居酒屋にあつて、つつましげに躍らせていた。

「これでヒデポンも年貢の納め時か」

チンサクはガラスの縁を唇に当てながら、うつすらと目尻に皺を浮かべて、ヒデポンを伺うように覗いてくる。

「そんなの、まるで、俺が遊び歩いていたみたいな言い方じゃなか」
「ほつつき歩いていたもようなもんだろうが。たくつ、くつついたり離れたりしてよ。一体、何年の付き合いだ？ 中学のころからだから、もう、十年以上だろ？ これで結婚しなかったら、ミミちゃんに後ろから刺されたぜ」

そうして、チンサクはようやくグラスをかたむけた。三分の一ぐらい流し込んだら、卓上にグラスを打ち下ろすと、ちよつと赤らんだ臉の縁で、ヒデポンを見つめてくる。

口許いっぱいに笑みをたたえながら。

「とりあえず、おめでとさん」

二十年来の悪友に祝福されるのが、なんだか気恥ずかしくて、ヒデポンは思わず緩んだ表情を、隠すようにしてやや伏せた。

「て、言ってもよ、式の前の日に新婦を一人で置いて、酒を飲んでるのはどうかしているぜ」

「いや、チンサクと会って言うたら、ミミもそうしろって言うていたし、まあ、いろいろ、くつついたり離れたりで、俺もミミもお前には迷惑かけたから」

「なんだよ、気持ちわりい。勘弁してくれよ、明日、泣くのだけは」
「いや、泣かないけどさ、ただ」

「なんだよ」

急に、その目元に陰を落としたヒデポンは、芋焼酎の水割りが入ったグラスを手にしなから、しかし、それを口に運ぶわけでもなく、グラスに浮かぶ結露の冷たさを掌にしたまま、じつとりと黙り込んだ。

「どうした。何かあったのか？」

チンサクの声が、この一席にだけ静けさを打つ。

「実は、言おうか言わないか迷っている」

と、ヒデポンの瞳は、喧噪と静寂とが外と内とにはっきりと隔たる沈黙にあつて、照明の光を陰鬱に忍ばせている。

「何を」

「小六のとき、お前と俺でやったあのことを」

「ハア？」

「しただろつ。放課後によ。お前と俺で、その、リコーダーを」

チンサクの目つきに、威圧がぼんやりと浮かんでくる。やがて、声を荒げた。

「やめる。何をとち狂ったこと言ってるんだ。絶対にやめる。これはお前だけの問題じゃないんだ。だいたい、言う必要があるか？ ガキのころにやったことだろつよつ」

「そりゃそうだけだよ。でも、実はあのことって、ミミは知っているんじゃないかって思うんだよ」

「え」

チンサクの悲痛な驚愕を振り払うように、ヒデポンはグラスの芋焼酎を思い切りあおった。

「う、嘘だろ……。そしたら、俺らは、小六のときからとんだ変態コンビ、ヒデちゃんチンちゃんだったってことか……」

合コンでもやっているのだろうか、座敷間から男女の笑い声がどつと上がった。ヒデポンは卓上に戻したグラスを握り締めたまま、チンサクはヒデポンを唾然と見つめたまま、それぞれ、週末の喧噪の中に取り残される。

「と、とりあえず、何か、飲めよ」

「ああ」

呼び鈴を押して、駆けつけてきた店員に、芋焼酎の水割りを再度注文した。

ほんの悪ふざけだった。たとえば、蛙の尻子玉に爆竹を突っ込んで隣の小学校に投げつけに出かけたり、大嫌いなガキ大将の自転車を盗み出して小川に叩き落としてみたり、そうした豪放磊落な行動と、当時は信じてやまなかつた悪ふざけの一部であった。

おい、好きな子のリコーダー、ペロペロしようぜ。

ちびりと舐めた酒が、五臓六腑に染み渡る。まるで、腸が焼けただれそんな後悔である。

「ヒデポン」

チンサクは呼びかけると、神妙な顔つきでヒデポンを見上げてきた。

「死ぬまでしらを切り通せ」

「でも、ミミは」

「でもじゃねえっ。いいか。お前はそりゃミミちゃんと結婚したくらいいいけどな、俺はどうするんだ。杉村佳奈子ちゃんとは何のあれもねえんだぞっ！」

「杉村は結婚してロンドンかどっかに行っただって話じゃんか」

「ロンドンかパリに行ってもなあ、同窓会つてもものがあるんだぞ。」

そのとき、ミミちゃんが杉村佳奈子ちゃんに言っっちゃったらどうすんだっ！ 俺は一生お前を恨む。一生結婚ができずに死んでいく俺は一生お前を恨むっ！」

「そんなのはチンサクの勝手じゃんかよ！」

「馬鹿かテメーっ！ 言おうとしているのがテメーの勝手だろうがっ！」

気づけば、彼らの周囲の席から話し声が消えていた。客たちは、酔っ払いの相当な喧嘩だと見たらしく、心配そうに、あるいはわずらわしそうに、二人に視線の先を当ててきていた。

二十年来の悪友同士は、ともどもにうつむく。間をごまかすようにして酒をなめる。

「ま、まあ、明日はお前の晴れの日なんだか、今日だけはやめようぜ」

「ああ。悪かった」

おとなしくしていたら、周囲に平常の騒がしさが取り戻された。ヒデポンは吐息をつく。

放課後の、西日に染まった官能の背徳は、チンサクの言うように墓場まで持つて行かなければならないのだろうか。

だが、ミミのあの軽蔑に満ちた目。

私、小六のとき、リコーダーをなめられたっばいんだよねえ。

ミミの視線は冷ややかにヒデポンを突き刺していた。恐ろしい。

ヒデポンは脳裏にありありと思い浮かべてしまって、下唇を噛みしめた。

「おい、ヒデポン」

はっとしてヒデポンが顔を上げると、チンサクは何も言わずにじつと睨みつけてきていた。

それこそ腐れ縁とも言うべきなのだろうか、あの馬鹿どもは式の前日だというのに飲みに行ってしまった。

ただ、悪態を思い浮かばせながらも、二見美由紀は人生でもっとも華やかな瞬間を翌日に迎えた人にしては、つつましいぐらいに静けさ包む一室で、パソコンの液晶画面に目を細めていた。

ミミちゃん、明日は行けなくてごめんね。

小学校六年生のときだった。秀人と、その悪友の健作が、放課後の教室に怪しげに忍び入り、それぞれ、周囲を警戒しながら、しかし、口許に卑猥な笑みを浮かべながら、教室の中をうろつろとしていたのは。

何をやっているんだろう、あの馬鹿どもは。

そして、美由紀は目撃した。秀人が自分のリコーダーをなめているのを。一体、何が楽しいのか、健作とけらけら笑い合いながらだった。

悪魔にでも取り憑かれてしまったような二人が見ていられなくて、美由紀は逃げ出した。そして、そのまま自宅まで駆け逃げた美由紀は、いてもたってもいられなくなり、冷蔵庫に貼り付けられてあった連絡網を引き剥がすと、健作がなめていたリコーダーの持ち主の杉村佳奈子に電話をした。

「最悪。でも、あいつらって先生に言ったりしたらいじめてきそうだから、ミミちゃん、今度、一緒にリコーダー買いに行こ」

佳奈子とまともに話したのは、百貨店にリコーダーを買いに行ったときが初めてだったろう。

「あの二人って本当に最悪だよ。蛙の爆弾をいっつも持ち歩いているし、吉山君の自転車を盗んだのもあいつらって話だし、本当に最悪。死んじゃえばいいのに」

気の強い佳奈子は終始、二人に地獄の罰を求めているた。

「はあ？　なんで、あの変態なの？」

と、中学の行事で猪苗代磐梯にスキー学習で行ったときの夜に、美由紀が恋心をひっそりと打ち明けたときも、佳奈子は眉をしかめた。

なんでだろう。今思えば、わからない。確かにあんな変態少年に恋をしてしまったのは、どうかしていると思う。

でも、恋の理由なんて、今更、どうでもいいだろう。十年以上も抱き合ったり罵り合ったりを繰り返してきたら、二人が始まった理由よりも、二人が一緒にいられる理由、これからを共に過ごせる理由のほうが何よりも尊いはずだ。

でも、遠い異国から祝福するわ！　C o n g r a t u l a t i o n s ! k i s s k i s s k i s s !　変態のハズバンドによるしく！

メールは写真付きだった。碧眼の男性とともに赤髪の赤ん坊を抱

えながら、佳奈子のはつらつとしたピースサインだった。

美由紀は微笑みながらノートブックを折り畳んだ。

多くの人たちに祝福されると実感するのは、人の縁の不可思議さだった。出会うべくして出会ったようにも思えるし、偶然にさらなる偶然が重なっていった結果のような気もしてくる。

でも、もつと、不思議なのは、生涯を共にすると誓い合った人だけでは、揺るぎない信念のうちに結ばれたような気がするからだ。

今、晴れの目を控えているのは、偶然でもない、必然でもない、まるで、最初から決められていたようなこと。

それが、あの馬鹿なのだから、神様もなかなか皮肉だ。

玄関口から鍵の下りる音があった。幸福に浸っていたこの新婦は、少々の余韻を表情に残しながらも、日常と変わらないおもむきで、秀人を出迎えた。

「おかえり。思ったより早かったじゃん」

「う、うん」

なぜか、秀人は美由紀から視線を逸らしながら、スニーカーを脱いでいく。酩酊の様子もなく、ただただ冴えない表情の恋人を美由紀はしばらく眺めていたが、秀人がスニーカーを脱いでも、そこに突っ立っただけなので、訊ねた。

「どうしたの。また、チンサクと喧嘩したの」

「違う。いや、実は、その」

すると、秀人はおもむろに床に両手をつき、額を美由紀の足下にこすりつけてきた。

「ごめんっ！ 実はおれっ、小六のときにミミのリコーダーをぺろしちゃったんだっ！」

美由紀は秀人の後頭部を冷ややかに眺める。

「そんなの知っているんだけど」

「あつ、えつ、あつ」

「佳奈子ちゃんも」

「あ……」

呆気に取られている秀人を前に、美由紀は苦笑しながら息をついた。

「ねえ、ヒデちゃん。私、もう二見じゃなくなるんだから、明日からはちゃんと美由紀ってよんでよね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2438y/>

婚約者がぺろぺろしたリコーダーの持ち主だった

2011年11月10日03時15分発行